

男女のジェンダーはコインの裏表－結婚と労働の関係式－

日時:平成 23 年 10 月 25 日(火) 16:30~18:00

場所:生活環境学部 E 棟 E109 講義室

テーマ:男女のジェンダーはコインの裏表－結婚と労働の関係式－

講師:島津良子氏

(奈良女子大学大学院修了、文学修士、奈良女子大学・立命館大学講師、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会 近畿部会役員)

参加者:本学教職員、大学院生、学部生、一般(72 名)



【講演概要】

新憲法のもと男女平等の戦後教育を受けた第一世代である団塊の世代とその子供世代の「いまどきの若者」を中心に、女性ジェンダーと男性ジェンダーの関係、結婚と労働の関係について、種々のデータをもとに紹介いただいた。現在定年退職期を経て老年にさしかかっている団塊世代は、高度経済成長という社会的基盤のもと「サラリーマンと専業主婦」という性別役割分担家族を形成した世代である。団塊の世代の結婚適齢期に相当する 1975 年は、女子労働力率が約 46%と戦後最も低い値を示した年であり、島津氏は戦後家族の第一画期と位置づけている。専業主婦の出現は、家事労働を女性の無償労働として定着させることとなり、政治、経済に興味があるが「家庭のことは二の次」の夫と、「関心事は家庭内の諸問題」である妻を生み出した。

つぎに、団塊世代の子世代の結婚と労働の実態と結婚観について紹介いただいた。1975 年を境に女子労働力率は上昇に転じ、男女雇用機会均等法が制定された 1985 年を島津氏は第二の戦後家族の画期と位置づけている。しかし、共働き率が増加を続けている現代にあっても、男性は長時間労働のために相変わらず家事に関与する時間は少なく、そのため家事の大部分を妻が負担している。そして、仕事と家庭の両立環境の不備により女性は出産を期に正規就労を断念せざるを得ない、女性労働者の過半数は低賃金の非正規雇用に甘んじなければならないという実態があるという。そして、意識の上でも男性は女性に対して口では「働いてよい」というが本音は家事に専念してほしい、一方女性は男性に自分より上であることを求める傾向にあるという。年収の高い女性と年収の低い男性の既婚率が低いという現状を生み出していることが述べ

られた。そのため、最後に、「希望のもてる話」として、先進国では働く女性が多い程出生率が上がる、女性の管理職比率が多い企業に営業成績の上昇がみられる、正規労働者として女性が働く方が出生率が高いことなどのデータが紹介された。従来の長時間男性型労働ではなく、男女ともに仕事と家事が両立できる持続可能な労働の実現、すなわち家庭における男女共同参画の実現が少子高齢化問題を解決する鍵であることが述べられた。

